

発達に遅いのある子どもたち 「わざわざ」をかかる子どもたち（前編）

子どもたち（前編）

4月に園や小学校に入学した子ども達も、ぼちぼち新しい環境に慣れ、おまかなく一日の流れの見当がつくようになり、先生の言うことを聞きながらその流れに乗れば、何とか周囲の子ども達の動きについていくことができるようになります。4月、5月の行事の忙しさに気圧されながらも、子ども達は徐々に「集団の動き」に合わせることを覚えていきます。

しかし、そのような一連の流れに乗ることが、さまざまな理由で難しい子どもが存在することも事実です。その理由の一つに「きづらさ」をかかる子どもがいることに気づかれているでしょうか。

きづらえていますか？

私達小児の言語聴覚士が受けた相談の多くは「ことばがない」「発音がうまくできない」という内容がほとんどですが、では保護者さんにお子さんの「きづらえ」について尋ねてみると、意外にも「たぶん聞こえていると思います」というくらいの答えが多く返ります。

おまかなく一日の流れの見当がつくようになり、先生の言うことを聞きながらその流れに乗れば、何とか周囲の子ども達の動きについていくことができるようになります。4月、5月の行事の忙しさに気圧されながらも、子ども達は徐々に「集団の動き」に合わせることを覚えていきます。

ことばが発達するためには、「きづらえ」は最も重要ですが、最近は産婦人科で「新生児聴覚スクリーニング検査」をするところも増え、聴覚障害のお子さんを早期に発見することも多くなってきました。しかし、そこに含まれない「きづらえ」の問題をかかえる子どもは必ず存在し、周囲の大人にも気づかれず、さらに子ども自身も気づかずにいることもあります。

その一つは幼児期によく起こる「中耳炎」。一般的には「熱が出て痛がり耳垂れが出る」タイプの「急性中耳炎」が知られており、色のついた鼻汁があるときによく起ります。これは周囲の人も気づきやすいと思いますが、実は中耳炎にもいくつか種類があり、熱も出ず痛みもないタイプの「滲出性中耳炎」は見逃されがちです。この中耳炎は鼓膜の奥の「中耳」という空間に様々な原因で「滲出液」が溜まり、鼓膜の振動を阻害してしまいます。鼓膜が振動することで、外界の音を電気信号に変え、聴覚神経を通して脳で認識することができますが、耳に滲出液が溜まるにつれ、徐々に鼓

「聞く」と「聴く」

「きく」を表現する一般的な漢字には「聞」と「聴」がありますが、この2つの意味には若干の違いがあり、「聞く」は周囲の音や声が自然に耳に入っているとき、「聴く」は周囲の音や声に注意を向けて認識しようとする行為、というように、無意識か意識的かという観点から使い分けることがあります。

前述の「滲出性中耳炎」は、幼児期に起こる「きづらえ」の問題の一つです。「聞こえ」の問題は他にもさまざまなものがありますので、日常生活でもしかして聞こえていないのでは?と感じたときは、躊躇せずに耳鼻咽喉科医師に相談していただきたいと思います。早く発見すれば、ことばの発達に影響せずに済むこともあります。

もう一つの「聴く」は、「聴きとる」と

膜は音に反応できなくなり、「ききづらさ」が生じます。日常生活では、大声でしゃべるようになつたり、テレビの音を大きくしたり、発音が不明瞭になつたりという症状で現れます。1歳前後から慢性的に罹患していると、ことばが発達する時期に、周囲の音声を十分にきき取れない期間が長くなり、発語の基礎となる「日本語の音の種類

の認識」が遅れ、ことばの遅れとなって現れることがあります。

「APD」はまだ詳しい原因はわかつておらず、明確な治療法も確立されていませんが、昨年秋ごろより専門家で作る研究グループが、大阪と首都圏を中心的小中学校と高校のおよそ5千人を対象に調査を始めました。この「APD」の子ども達が、集団の中でどのように過ごし、どのようなことで困っているのか、次回はその内容についてお伝えしていきたいと思いま

す。

「APD」はまだ詳しい原因はわかつておらず、明確な治療法も確立されていませんが、昨年秋ごろより専門家で作る研究グループが、大阪と首都圏を中心的小中学校と高校のおよそ5千人を対象に調査を始めました。この「APD」の子ども達が、集団の中でどのように過ごし、どのようなことで困っているのか、次回はその内容についてお伝えしていきたいと思いま



文書寄贈 NPO法人「じゅる・コミュニケーションの発達支援」